平成二十五年度　昼間部　冬休み前集会　講話

前向きな考え方なのか、そうでないのか。例え話によく使われる言葉に次のようなものがあります。「コップに残る半分の水を見て、もう半分しかないと思うか、まだ半分もあると思うか」。

少し例えは違うかもしれませんが、ではこの一年間は、もう終わろうとしているのか、あるいは、長かったと感じるのか。皆さんはいかがでしょう。充実した高校生活を過ごせているかどうかと大きく関係するのではないでしょうか。

三年次生の皆さんは、特に夏以降進路実現のために頑張ってきました。大半の人は進路先が内定しましたが、まだ挑戦を続けている人もいます。未内定の人、くじける必要はありません。必ずあなたを必要とする企業があるはずです。今まではタイミングが合わなかっただけです。自分の可能性、持てる力を信じて挑戦し続けてください。

二年次生の皆さんはすでに三年次生から生徒会役員や部活動を引き継ぎ、昼間部の中核として活躍してくれています。今後さらに、「卒業生を送る会」の企画運営など、学校行事の中心となって活躍してくれることを期待しています。年明け早々には修学旅行が控えていますね、万全の体調で参加できるように、健康管理には十分注意してください。

一年次生の皆さんは入学以来八ヶ月が経過し、高校生活にもすっかり慣れたことでしょう。では、まだ二年余りも高校生活が残っているのか、二年余りしか残っていないのか。卒業までのこの期間をどのような思いで過ごすかで違ってくるのでしょう。卒業後の自分自身の姿をしっかりとイメージする、つまり目標をしっかり定めてその実現に向けて努力することが大切なのは言うまでもありません。「後悔先に立たず」です。卒業間際になって悔やむことがないよう、日々の学校生活を大切に過ごしてください。

さて話は変わりますが、十一月の下旬東京で行われた全国生活体験発表大会に行ってきました。皆さんも聴衆の一人として参加した県大会で最優秀者に選ばれた、本校通信制一年の山邊恵介君の応援です。

県大会出場者の素晴らしい発表を覚えている人も多いと思いますが、さすがに全国大会。各地区から選ばれた58名の発表は、技術・態度はもちろんのこと、その内容にも深く感銘をうけました。

その中から私が今でも強く印象に残っている人の発表について紹介します。発表者の名前はアシラフ・アミナさん。大阪府立布施高校定時制の三年生です。お父さんの仕事の関係で4年前にパキスタンから来日しました。イスラム教徒である彼女にとって日本は全くの未知の国。その彼女が、「日本の高校は男女が平等に勉強できる」という事実を知ったときは言葉では言い表せないほどの喜びだったそうです。

パキスタンでの「男女差別」の実情を語ってくれました。「女性は子どもの頃から勉強をすることが許されない」「大人になっても結婚の自由がない」「家の中でも男の兄弟が偉くて姉妹は後回し」。このような「男女差別」が激しい環境で育った彼女は最後にこう結びました。「この国では性別に関係なく、努力すれば自分の将来を明るく照らすことができる」と。

世界には、私たちが当たり前と思っていることが許されない国がたくさんあります。皆さんは、「差別」を許さない教育制度で勉強できる事への感謝の気持ちを忘れてはいけません。

ただ、確かに日本は法治国家ですから、「法の下の平等」の権利を有します。つまり様々な理由から人を「差別」するということについて厳しい国です。しかし、残念なのは、「差別」ではないけれどもこれだけ「いじめ」が問題になっている国はあるのでしょうか。「差別」は偏見などで差をつけ、価値の低いものとして扱う。「いじめ」は弱い立場の者を苦しめる。一見違うようですが、この二つに共通するのは、「立場を、人を、自分より下に見る」ということです。

「いじめ」は学校だけではなく大人の社会でも問題になっています。私たち教師も、その立場から生徒の皆さんに対して、意識することなく傷つける言葉を使っているのかもしれません。そういうことがないように、先生方みんなでもう一度研修を深めて、皆さんから信頼される教師を目指していきたいと思っています。

みなさんがお互いの個性を尊重し合い、違いを認めることの出来る大きな心をもった人に成長できることを期待しています。平成二十六年が皆さんにとって素晴らしい年となることを願って私からの話を終わります。